田端英雄の里山研究
―「里山」をめぐる「認識と関心」―

丸山　徳次

（1）認識を導く関心

田端英雄氏が里山研究に向かう機縁となった大きな出来事は、京阪奈丘陵の開発問題だった。関西学研都市が建設され、やがて同志社大学田辺校舎が新設された。これらの開発問題に関わった田端氏は、①貴重種（例えばオオタカ）を持ち出しての自然保護運動には限界がある、②身近な自然がまったく解っていない、③身近な生き物たちの多くが絶滅の危機に瀕している、④従来までの生態学には、人の手が加わった「自然」についての説明原理が欠落している、という認識に到達した。こうして1992年11月、里山研究会が設立されることになり、『里山の自然』（保育社、1997年）が田端氏の編著として出されることとなった。

『里山の自然』の中にある日比伸子氏の水生昆虫についての研究を、田端氏は格別重要視する。ため池と田んぼといった異なった環境を移動することで生活史を成り立たせている昆虫が注目された。このような水生昆虫を代表例として、複数の空間・時間に暮らす身近な生き物の生態がわかってきた。人の手が入らなくなって環境が急変することで、絶滅する種があることがわかってきた。こうして田端氏は、里山林と農業環境（田んぼ、畦、ため池、用水路、等）とがセットとなった自然を「里山」と定義し、景観生態学との出会いの意義を強調する。

（2）実践への関心（労働と相互行為）

田端氏の考えでは、里山の保全は日本の自然の保全に直結する。つまり、絶滅危惧種の増加という事実認識が、里山の保全という実践への関心を生み出している。そして、里山の保全は、里山林の保全と農業環境の維持・再生との両方を含まねばならない。初期において田端氏は、小規模分散型熱電併給システムの可能性を追求し、新たな炭焼き

の可能性を探求したが、やがてバイオマス利用としては、ペレット・ストーブを追求し、また粗朶利用の拡大を探求するとともに、ナタネを活用したバイオディーゼル開発を提案するようになっている。こうして、私の見るところ『日本環境年鑑2002』で初めて、「林業的自然」と「農業的自然」をあわせた自然を「里山」の定義とするに至っている。かつてのセットとしての里山の定義が景観生態学的な定義であったのに対して、近年は、縦割り行政をにらんだ政策論的な定義に移っている、と解釈することもできると思う。

(3) Retrospective：認識と関心－問いの連鎖

生態学者・田端英雄氏の以上のような研究・実践の経緯を振り返りつつ、現時点における活動を見ると、次のような問いの連鎖として、捉え返すことができるだろう。

＜田端英雄氏はバイオマス利用や粗朶利用を研究・実践している。何故か？＞

①それが日本の自然を維持することにつながるから。〔里山の保全・再生活動は、生物多様性維持・再生の実験であり、実証である、という意味を持っている。〕

②日本の自然にとって「里山の自然」（里山的自然）は重要な要素であるから。

③日本の多様な生物の多くは里山的自然に生息しているから。

以上の回答から、「田端英雄氏は、里山的自然を再生・維持することによって日本の生物多様性の保全を狙っている」というように、現時点での田端英雄氏の研究・実践を総括することができるだろう。ここから、次の問いが生じてくる。

(a)「里山の自然」とはどんな自然か？

この問いは、自然科学的・生態学的な問いではあるが、「里山の自然」が里山林と農業環境とがセットとなった自然であり、林業的自然と農業的自然との複合的自然である以上、絶えず人の手が入ることによって一定の生態系が維持される必要がある。つまり、人為的影響から独立した「自然」、すなわち手つかずの原生自然（wilderness）としての自然ではない。むしろ人的影響との相関関係によって成り立つ自然であって、そもそもこのような自然を「自然」と見なすことができるのか、という原理的な問いが成り立つ。しかし、そもそも「自然」もしくは「自然的」とは何か、という問いに生態学そのものが答えることはできない、と丸山は考える。

田端氏は、私との私的な会話の中で、「恐怖心」を強調した。つまり、里山の調査に一人で山に入るとき、出くわす動物に心から恐いと思うことがある、と言う。私自身は、『里山

学のすすめ』の中で、里山を「文化としての自然」と規定しつつ、次のように論じた。
「私はあえて『文化としての自然』と呼ぶことで、自然と無関係に成立する文化は存在しないこと、そして、人間の生活と文化の形によって規整される自然が存在する、ということを主張したい。あるいは、人間の積極的な働きかけが、自然のあり方を規定するという意味で、人間の積極的・能動的な働きの面を強調すると同時に、そこで人間が出会うのが人間が『創った』ものではない自然であり、野生の生きものたちである、ということを強調するために、里山を『文化としての自然』と呼ぶのである。」(p.104f.)
(b) なぜ生物多様性の保全が大切か？

この問いは、哲学的倫理学的な問いである。丸山との私的な会話の中で、田端氏は、私のこの問いに対して、それは「アプリオリだ」と答えた。つまり、生物多様性の維持が大切だ、という価値観は、生態学的研究によって得られるのではなくて、それに先行するものである、という意味であろう。田端氏は、生態学の研究にとって想像力が重要であることを、しばしば強調する。例えば、日本の田んぼの畦の植生が、中国大陸（内蒙古）の草甸の植生と極めて類似していることを発見したとき、田んぼの畦が日本全土に広がっていることを想像すれば、田んぼの畦の植生とは、日本の草甸植生である、との認識に至る。私はこのような想像力を、「生態学的想像力」と呼びたい。また田端氏は、生態学の研究のなかで、一つの種が消滅することが、それの属する生態系にどれだけ大きな影響を与えるのかについて、大きな恐れを懐く、という意味の発言もされる。つまり、田端氏の言う「アプリオリ」は、文字通り先験的・先天的ということではなくて、ながい間の生態学者としての経験が生み出した価値直観であり、生態学的想像力と結びついた価値直観である、と私は考える。そして、そうした価値直観が、同時に、生態学の研究を推進し、生態学的認識を構成させる「関心」となっているのだと、私は解釈する。

上の（a）（b）二つの問いは、次の前提的な問いにつながっている。この問いは哲学的な問いであり、社会人文科学的な問いでもある。すなわち、
〈われわれはどのような「自然」を望むのか？〉　－　この場合、「自然」の箇所に、「環境」、「社会」、「生活」、「人生」といった概念を代入したり、並置したりする必要もある。そして、現在、哲学者たちや環境学者たちにおいて共有されつつある回答の一つが、「持続可能社会」である。「多様性」と「持続可能性」とが、価値理念として、最も重要視されつつあり、その意味規定と実現とが探求されている。田端氏の試みもその一つだと思う。